
女心

satoshi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女心

【著者名】

N6453C

【作者名】

satoshi

【あらすじ】

恋愛にして無沙汰の優子と浩一は、やがて結ばれることになるが、浩一には意外な秘密がある。

「どうして出て行こうとするの。」

浩一は優子に、懇願するように言った。

「あなたの事が信じられないの。」

優子は半ば履き捨てるよう言い返した。

付き合い始めて3ヶ月が経つ。

優子の浩一に対する愛情は瞬時に、栓を抜かれたバスタブのよみどり、渦を巻きながら消えていった。

佐伯浩一は一流企業の商社マンだ。

金属関係の営業を担当し、今年やっと主任まで昇進した。

現在30歳だがこの歳にしては遅い昇進だ。

同期の連中は課長にまで昇進している者もいる。

優子とは同じ社内で知り合った。

同じ社内といつても、優子は経理課で違うフロアになるが、交通費の精算などで週に2回程優子の部署に行く。

最初のうちは伝票の受領印の所に判を押し、金額を受け取るだけの事務的な会話だけだったが、次第に浩一の方から話しかける様になつた。

優子も浩一に話しかけられることに、満更でもなかつた。

ただでさえ、無機質な部署。 加えて上司は一番若くて45歳、その他は皆50歳以上の

中年男性ばかりだ。詳しい歳は、優子があまりにも興味が無い為知らない。

優子は今年で26歳になる。 周りから見ればまだ肌がピチピチで、アイドル的存在に

見られているが、優子はこの歳になつてまだ彼氏もいない事に、寂しさを感じていた。

浩一もそんな寂しげな優子に、なんとなく気づいていた。

それだけではない、同情とは別の感情が芽生え始めたのだ。優子は童顔で体型もスリムというわけでは無い。しかしなぜか包容力を感じさせる。

そういうふうに浩一は引かれていった。

2人が付き合い始めるまで、さほど時間を必要とはしなかった。社全体の納涼会の時に、浩一の方から誘つた。

納涼会は夜仕事が終わった後、近くのビヤガーデンで行われた。開放的な空間と酔いのせいもあり、2人の会話はビールがすすむにつれて盛り上がつた。

「2次会は2人で抜け出して、どつか別の店に行かない？」

「はい。」

優子はまるで、その言葉を待つていたかの様に即答した。支店長の長い閉めの言葉がやっと終わり、一本締めをした。

2件目は2人供、別々に抜け出す事に成功した。

途中近くのコンビニで待ち合わせをし、2人は浩一の行きつけのバーに向かつた。

「結構お洒落な店知つてますね。」

ジャズの静かに流れる、ダウンライトの店内に酔いしれながら優子は言った。

「ありがとう。ここは仕事で行き詰つたりしたときに、1人でよく来るんだ。」

「羨ましい。いわゆる隠れ家つてこと。」

「まあ、そんなところ。誰にも教えてない、君だけだ。」

浩一が勧めるマティニーを飲み、優子は黙つて微笑んだ。

優子の頬はうつすらと緋色になり、次第に浩一の肩に寄りかかるよ

うに身を任せていた。

(この感覚はいつたい何。まるで浩一さんと昔から知り合いのよう
な安心感。私たち2人は出会つべくして、出会つたのかもしない。

)

終電の時間が近づく頃、浩一は優子の目を見つめながら言った。

「またこつして、2人で会つてくれるかな。」

優子は何も言わず、うなずいた。

2人はそれから週に2日程、会う様になつた。なぜか社内では、
事務的な会話に戻し、優子が浩一に交通費を渡すときに、メモも一
緒に渡した。

「いつものスタバにy.m.f.:30.ね。 優子」

この2人だけの秘密の付き合いという所に、優子はスリルを感じて
いた。

浩一もメモを受け取ると

「有難う、お受け致しました。」と微笑んだ。

仕事が終わると優子は、どこも寄らず真っ先にスターバックカフェ
へ向かつた。待ち合わせ時間前にも関わらず、心が躍つている。

20分後、浩一が入つて來た。優子を見つけると、頭をかきながら
近づいてくる。

優子はこの瞬間がとても好きだ。

彼の、はにかんだ笑顔がたまらなく好きなのだ。
まさしく自分は恋をしていると、実感している。

「ごめんね、いつも遅くなつて。」

浩一が申し訳なさそうにアイス・ラテを飲みながら言った。

「全然気にしてないで、経理と違つて営業は大変だもんね。」

「ありがとう。」

暫し沈黙の後、優子が恥ずかしそうに言つた。

「浩一さん、今日家に来ませんか、アパートでちょっと狭いですけ
ど、良かつたら食事。」

馳走します。」

「マジで。凄く嬉しいよ、もちろん行くよ。」

浩一は喜んで応えた。

付き合い始めて3ヵ月目の、秋の深まる涼しげな夜の出来事だった。

優子の部屋は女の子らしく綺麗に整頓されていた。
カーテンも淡いグリーンで統一され出窓には、ポトス、パキラなど
観葉植物も
置いてある。

優子は家に着くとすぐ、料理の支度を始めた。
彼女の料理はとても手際よく、フライパンの扱う姿もベテランその
ものだった。

エプロン姿の優子に、浩一は後ろから抱き着きたい感情を、必死で
抑えた。

しばらくして、料理を皿に盛り付ける音がした。

「お待たせしました。お口に合わないかもしれませんけど。」

恥ずかしそうに言いながら、優子はサラダとオムライスをテーブル
に並べた。

フワフワの卵の上にケチャップが上品にかけられている。

ちょっとした洋食屋に、出てきそうな出来栄えだ。サラダもサニーレタス、きゅうり、プチトマト、ベビーリーフまで添えられている。

「うあ、めちゃ美味しそうだね。乾杯しよう、優子の初ディナー
に。」

2人は、白ワインの入ったグラスを重ねた。

優子の料理は、今迄味わった事が無いと感じる程、美味しかった。

久々にオムライスを食

べたという事もあるが、何より卵とチキンライスの、口の中でとろける味わいが、たまらなかつた。

「とっても美味しいよ。よく作れるね、こんな美味しいの。」「ありがとう。」

優子は笑顔で応えた。

食事が終わり、優子の入れてくれたダージリンティを飲み終え、2人でソファに座った。

優子は自分の部屋とはいえ、この密着した距離に少し戸惑いを感じていた。

やがてテレビを見て笑い合い、緊張も解れ一瞬の沈黙の後、見つめ合った。

二人は自然な流れでキスをした。

浩一のそれは、優子の唇を優しく包み込み、いやらしくとろけさせた。

舌を絡ませる度に、優子は全身に電流を流されたような感覚を覚えた。

浩一はシャワーを浴び、バスタオル1枚になつた優子を、優しくベッドにエスコートした。

「なんだか恥ずかしいわ・・・私。」

「大丈夫、僕に任せて。」

耳元で囁くように言つと、優子の耳たぶから、うなじにかけてゆっくりとキスを滑らせ、身にまとつているバスタオルを、はずした。

横になつて一糸纏わぬ優子の姿に、浩一は見とれた。

首筋から、ふつくらとした柔らかな2つの山脈へキスをするたびに、優子は浅い溜め息をついた。

そして頂上の突起物を軽く噛んでみせると、溜め息は声とともにその間隔を狭めていった。

浩一の手は山脈を十分に堪能したあと、下へすべらせ、なだらかな平野から深い茂みへと入つていった。

手探りで洞窟を探していくとそこはすでに、溢れ出る蜜でいっぱいになつている。

優子の息遣いが徐々に乱れていくのが、わかつた。

浩一の指が蜜を伝い、洞窟に入ると優子は身体をくねらせながら、

あの妖艶な声を上げた。

彼のテクニックは纖細で時には激しく、そしてやさしくじらす。まるでピアノを奏でるような指使いで優子を刺激した。

優子はどうしようもない程の快感に、頭がおかしくなりそうだった。そして優子は浩一を受け入れた。

浩一の愛し方は、巻き付きながらねつとりと静かに、確実に獲物に侵入する大蛇そのものだった。

痛みというよりもむしろ、鳥肌が立つほどの快楽にもがいていたと、言った方が良いかも知れない。

やがて浩一は絶頂を迎える時を、優子に告げると動きが段々と、激しさを増してきた。

優子の快感も絶頂まで達し、2人はベッドにつづ伏せになった。

翌朝、2人は一緒に通勤した。

通勤途中、浩一はとても新鮮な気持ちになった。

通勤経路が違うこともあるが、それよりなんとも言えない幸福感が、浩一をそう思わせた。

いつもは、つらいと感じる満員電車も、今は優子との密着に満足している。

いつもは、べた付くカップルを軽蔑の眼差しで見ていたが、今は彼らを理解できる。

浩一は優子とすつといつまでも、一緒にいたいと感じていた。

「優子、今度は僕の部屋に来ないか、見せたい物もあるし。」

「うん。でも見せたい物ってなに?」

「それは内緒。今度来てくれたときにな。」

「うん。」

一人は両手を重ね合わせながら、満員電車の中、見つめ合っていた。

会社の近くまで来ると、浩一はネクタイを変えていない事に気づき、急いでコンビニへ向かった。

優子が先に会社へ着き、ロッカールームで着替えていたと、後ろから同期の加奈が話しかけてきた。

「ねえ、ねえ見ちゃったわよ、いつから佐伯主任とラブラブ通勤するようになったの？」

「いいじゃない別に。ていうか見てたの？」

「や、やだあ偶然よ・・・でも優子、彼やめといた方が良いよ。」

「どうして？意味わかんない。」

優子は少しムッとした表情で言った。

「怒らないで聞いて欲しいんだけど彼、浮気性つて噂があるの。営業の美香が言ってた。」

佐伯主任が携帯で誰かと話している時に、いろんな女の人の名前言っているの、たまたま聞いたらんだって。」

「だからって浮気してるとは限らないわ。私は彼を信じてるの、もう構わないで。」

「そ、そうだよね、ごめんね。」

着替え終わると優子はすぐ、自分の席に着き仕事を始めた。

優子は少し不安になつた。加奈の言つている事は本当なのか。

浩一の今までの私に対する優しさは全部嘘だったのか。

だが10分後、その疑いも浩一からの携帯のメールで全て吹き飛んでしまつた。

『今会社着いたよ、ギリギリセーフだつた。そういうえばさつきつた事覚えてる？僕の家に来て欲しいって事。今週の金曜日だけど、どうかな。もしダメだつたらメールしてね。あと、優子と通勤している途中思つたんだ。僕には君しかないなって・・・愛しているよ』

優子。 浩一』

優子は了解の意のメールを返信すると、自分が少しでも浩一を疑つてしまつた事を後悔した。

優子は金木犀の花が大好きだ。橙黄色小さい花を密集させて、開花し続ける。

この花たちを見ていると自然と心が和む。

朝、いつも通る住宅の金木犀を見ながら優子は思った。

今日は浩一と会う日。しかも浩一の家に行けるという嬉しさが優子の足取りを軽くした。

会社でも、優子の頭の中は浩一の事で頭がいっぱいだつた。部長に対しても“浩ちゃん”と間違えて彼の呼び名を言つてしまつた程だ。

「どうしたの優子、今日妙にテンション高くない？」

加奈が心配そうに話しかけてきた。

「そんなこと無いわ。いつも通りよ。」

優子は必死で冷静さを取り戻した。

26年間生きてきて、こんなにも自分が高揚できるのが不思議でならなかつた。

夕方、その日の業務を全て終え、優子は急いで私服に着替えた。社の守衛に挨拶をして外に出ると、浩一が待つていた。

「お疲れさん。じゃあ行こうか。」

2人は自然と手をつなぎ浩一の住むアパートへ向かつた。

途中近くのスーパーへ立ち寄り、夕食の食材を買つた。

彼のアパートは都内にしては珍しく、周りを木々に囲まれた静かな、住宅街の一角に建つっていた。

彼の部屋は2階建ての2階部分、一番奥の部屋だつた。

浩一がスーツの上着から鍵を取りドアを開けた。

「さあ、どうぞ。ちょっと散らかっているけどね。」

「おじやまします。」

優子は少し緊張していた。男の部屋に入るのは、初めてではないがあまりにも久々の事だつた。

「ちょっと待つてね今電気点けるから。」

浩一が手前のキッチンを抜け、奥の部屋に入ると、馴れた手つきで電気のスイッチを入れた。

優子も後から部屋に入った。

「わあ、こっぽい、なんか飾って・・・え？」

優子は一瞬凍りついた。そしてすぐこ、自分で血の気が引いていくのがわかった。

浩一の部屋には、部屋一面にびっしりと、こちらを向いて人形が飾つてあつた。いやファイギュアといった方が良いかもしない。

よく見るとそのファイギュアたちは、殆ど洋服を着ていない。着ていたとしても水着姿、もしくは制服姿で下半身は裸など優子には、到底理解できないものばかりだつた。

壁に張つてあるポスターは、メイド服姿のアニメの女の子が、こちらを向いて微笑んでいる。

優子は手に持つていたスーパーの袋を、その場で落とした。

「どうしたの、早く入つて来なよ。あ、これ? そうそう、この子達を優子に見せたかったんだ。すごいかわいいだろ、特にこのサイバーホンジュルの、メイヤちゃんのお尻なんかすんごいプリンプリン。あと、このストリートファイターズの眠香ちゃんの胸、見て見て、乳首ちょーリアルでしょ。それからあ、この抱き枕。書いてある子が、どきどきメモに出てくる女の子だけじ、名前なんだと思つ? そう優子つて言つんだ。いつも抱きながら寝てるよ、嬉しいだろ。あとなえ・・・。」

浩一は目を輝かせながら優子に説明した。

「やめて。」

優子は震えた声で言つた。

「え、どうしたの、なんで震えてるの?..」

浩一は優子の肩に触るうとした。

「いやあああ！」

優子は部屋一面に響き渡るような悲鳴を上げ、出て行つとした。浩一は必死で優子の腕をつかみ、問いただした。

「なんで逃げようとするの? わからないよ、教えてよ。」

「あなたが、信じられないからよ。」

「もしかしてあの子達に嫉妬しているの、それなら大丈夫、あの子

達との恋は終わったから。」

「ますます信じられないわ、もう一度と触らないで、ちょつまら。

」

優子は浩一の掴んでいる腕を必死で払い、部屋を出て行った。浩一はしばらく呆然として、抱き枕を抱きながらつぶやいた。

わからない、何故なのか、どうしてなのか全くわからない。女心がわからない。

教えて優子ちゃん。

Fin

(後書き)

最後までお読み頂き誠に有難うございました。
もじょうじければ感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6453c/>

女心

2010年10月28日06時48分発行